

音は語る

—福島サウンドスケープの9年—

永幡 幸司 (福島大学)

■福島サウンドスケーププロジェクト■

東日本大震災に起因する福島第一原子力発電所の爆発事故により、大量の放射性物質が大気中に放出された。放出時の風向きの影響もあり、原発から約60kmの距離に位置する福島市にも大量の放射性物質が飛来した。

そのような環境下での福島市民の暮らしは、事故前のそれとは大きく変わった。それに伴い、福島市内で聞こえてくる音の世界も変わった。その様子を録音し、ネット上で公開しようというプロジェクトが、福島サウンドスケーププロジェクトだ。録音は2011年5月1日に開始し、ホームページの公開は同年5月8日からである。そして、このプロジェクトの記録を作品(ホームページも含む)として公開する際の名称が、『福島サウンドスケープ』である。



■放射能による沈黙■

2011年5月。福島の新緑は、例年どおり、美しかった。小鳥の森、信夫山、新浜公園。緑が豊かな空間では、小鳥たちが春を謳歌していた。水辺からは蛙の声も聞こえてきた。いつもどおりの光景だ。しかし、例年と異なることが一つ。人の気配が全く感じられない。



信夫山



新浜公園

福島市のまちなか。昼も夜も、道行く人の数は少なかった。通りがかる人の多くは、足早だ。

レイチェル・カーソンは、その著書『沈黙の春』を、化学物質に汚染され、小鳥たちが鳴かなくなった春の話から始めた。しかし、放射能で汚染された福島で起こったことは、その逆だった。小鳥や蛙たちはいつもどおりに野外で歌を奏でていた。沈黙したのは、被曝を怖れた人々の方だ。

このような放射能による沈黙は、1年以内で終息したところもあれば、数年にわたって続いたところもあった。

■除染をめぐって■

汚染地の日常生活の中での余計な被曝を避けるためには、生活圏内にある放射線源を取り除くしかない。そのため、福島市内では、2011年初夏から2018年2月にかけて、公的な除染作業が行われた。除染では、表土の剥ぎ取り、落ち葉さらい、高圧洗浄など、場所に応じた様々な方法で放射性物質が除去された。



福島大学の除染



造成中の仮置場

除染で出た放射性物質は、フレコンバッグに詰め込まれ、人の日常生活域から離れた場所で保管される。人の生活空間から離れた場所は、野鳥など生きものたちの住処と一致することが少なくない。

現在、仮置場に置かれたフレコンバッグは、順次、中間貯蔵施設へと運ばれている最中だ。

あなたはこのような福島の世界から、何を聞き取りますか？